

研究報告

立ち会い分娩をした夫の体験

藤川 友恵¹⁾, 竹林 桂子²⁾, 高野 みち子²⁾, 葉久 真理²⁾

¹⁾元徳島大学大学院保健科学教育部, ²⁾徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

要旨 目的：本研究では、立ち会い分娩をした夫の体験を明らかにすることを目的とする。

方法：本研究に同意の得られた、初産婦の夫11名を対象として、妻の産褥入院期間中に、インタビューガイドに基づき、入院から分娩後2時間までの体験についてインタビューを行い、質的記述的に分析した。

結果：立ち会い分娩における夫の体験として、171のエピソード、44のコード、16のサブカテゴリーが抽出され、【わが子を迎える喜びと感動が湧く】、【無力な自分にとにかくできることを手探りでやってみる】、【母親となる妻へ称賛の念を抱く】、【父親としての意識が芽生える】、【医療者にさまざまな感情を抱きながら、任せる】、【自分なりに分娩の様相を読み取ろうとする】の6つのカテゴリーが抽出された。

結論：夫は、わが子を迎える喜びと感動が湧く中で、自分の無力さを感じながら、それでも自分にできることを手探りでやろうとしている様子が伺えた。医療者には、苦しむ妻を前にして、自分の辛さや不安を表出することなく、ひたすら立ち会い続けている夫の心情を酌み取り、夫にとってもよい分娩体験となるような関わりが求められる。

キーワード：夫、立ち会い分娩、体験

はじめに

21世紀の母子保健の主要な取り組みを提示するビジョンである健やか親子21の最終報告¹⁾では、妊娠・出産に満足している者の割合は増加しているとの結果であった。この出産満足の構成要素には、パートナーによる支援が挙げられており²⁾、出産満足感を高めるためには夫婦で取り組むお産が有効である^{3,4)}と報告されている。夫婦で取り組むお産としての夫立ち会い分娩は、その意義⁵⁾や利点・欠点^{6,7)}の視点から多くの調査が行われており、夫立ち会い分娩時の夫の心理では、妻を支えたい⁸⁾、妻のそばにいて安心感を与えられたと思った・自分も一緒に出産に取り組めたと感じた⁹⁾と肯定的なものがある一

方で、何をしてもよいのかわからない¹⁰⁾、先の見えない出産に対する不安¹¹⁾、無力感や心身の疲労感^{8,12)}といった否定的なものも見られている。

また、夫立ち会い分娩の体験がその後、夫にどのような影響を与えるのかについての調査では、妻への愛情の増大⁸⁾、子どもがかわいくてしかたなくなる¹³⁾、子どもへの愛着行動が多い¹⁴⁾、対児感情尺度において接近得点が高い¹⁵⁾、育児参加度の上昇^{13,16)}などの肯定的な影響を及ぼすものや、パタニティブルーを示す者もいる⁷⁾など否定的な気持ちを抱くものもあり、「お産は生々しくてこわいものだと思った」と回答した者は、次回も立ち会いを希望する群よりも次回は立ち会いを希望しないと考える群で有意に多い⁹⁾など、せっかく立ち会ったのよい経験となっていない事例もある。そこで、立ち会い分娩における夫の体験を肯定的なものにし、出産への満足度を高め、夫が出産の場において自らの存在価値を見いだせるよう支援するために、夫が、分娩に立ち会う中で、どのような場面で、どのように感じ、思ったのか、その

2015年1月5日受付

2015年5月12日受理

別刷請求先：竹林桂子, 〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15
徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

体験の全体像を捉えていく必要があると考えた。

本研究では、夫立ち会い分娩が、妻と夫双方にとって満足な体験となるために、分娩期に夫はどのような体験をしているのか、具体的な場面あるいは状況を捉えて明らかにする。

研究目的

本研究の目的は、妻の分娩に立ち会った夫がどのような体験をしているのかを明らかにすることである。

用語の定義

1. 立ち会い分娩

本研究では、立ち会い分娩を、時間の長短にかかわらず、夫が妻の分娩第1期から分娩後2時間まで付き添ったこととした。

2. 体験

本研究では、体験を、文献¹⁷⁾を参考に、立ち会い分娩中に生じた、夫の具体的な感情、思い、気持ちとした。

研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究対象者

地方都市にある第3次医療施設において、妻の出産に分娩第1期から分娩後2時間まで付き添った、初産婦の夫11名。

3. データ収集期間

平成25年5月30日から平成25年7月21日

4. データ収集方法

妻の産褥入院期間中に口頭と文書にて研究の説明を行い、研究参加に同意を得られた者に対して、後日母児の面会に来た日に、インタビューガイドに基づき半構成的面接を行った。インタビュー内容は、立ち会い分娩を経験した夫の体験を引き出すことができるように、立ち会い分娩がどのような体験だったのかをできるだけ時系列で振り返り、語ってもらえるような質問とした。具体的

には、立ち会い分娩前のイメージと立ち会って初めての感想を導入部分とし、①入院から分娩後2時間までの印象に残る出来事、②さまざまな出来事の中でそれがどのような体験として知覚されているか、また自分にとってどのような意味をもったのかなどである。インタビューの際は、対象者のプライバシーが守られる個室を確保し、実施した。インタビューの内容は、対象者の了解を得て録音した。インタビュー回数は一人当たり1回、インタビュー時間は約30分から60分間であった。なお、研究者は、研究対象者の妻の分娩には立ち会っていない。

5. 分析方法

- 1) インタビュー内容から逐語録を作成し、立ち会い分娩をした夫の体験を表していると考えられた内容を抽出した。
- 2) これらの内容から明らかとなった立ち会い分娩中の夫の体験を、その意味内容を損なわない程度に要約し、事例毎にコード化した。
- 3) 次に、全事例のコードから類似した内容をまとめてサブカテゴリー化し、さらにカテゴリーへと集約した。
- 4) 分析の全過程において、メンバーチェックを行い、さらに、研究指導者のスーパーヴィジョンを受けることにより信頼性と妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

本研究は、徳島大学病院臨床研究倫理委員会の承認(No.1669)を得て行った。対象者に研究の主旨・方法、途中辞退の自由、匿名の厳守、カルテ情報の使用、プライバシーの保護などについて文書と口頭で説明し、同意書に署名を得た。データの取り扱いには慎重に行い、本研究以外には使用しないこと、研究終了後は破棄することを約束した。

結 果

1. 対象者の属性 (表1)

対象者の平均年齢は29.3±4.8歳であった。分娩に立ち会った時間は、第1期では45分から30時間、第2期では49分から3時間59分であった。分娩時に医療介入のあった事例が8例あった。

表1 対象者の属性

対象	年齢	分娩立ち会い時間		立ち会った分娩への医療介入の有無
		分娩第1期	分娩第2期	
A	39	30時間	1時間	有：促進分娩
B	27	13時間	1時間	有：促進分娩
C	37	6時間40分	1時間9分	有：促進分娩，人工破膜
D	25	2時間	2時間48分	有：吸引分娩，会陰切開
E	25	13時間50分	2時間24分	無
F	30	1時間53分	2時間43分	無
G	31	18時間40分	1時間10分	無
H	30	20時間	50分	有：誘発分娩
I	26	3時間26分	49分	有：人工破膜，会陰切開
J	27	45分	2時間53分	有：会陰切開
K	25	13時間35分	3時間59分	有：促進分娩，吸引分娩，会陰切開

2. 立ち会い分娩をした夫の体験（表2）

得られたデータは、171のエピソード、44のコード、16のサブカテゴリーに分類でき、6つのカテゴリーに集約することができた。

以下に、立ち会い分娩をした夫の体験を示す。なお、【 】はカテゴリーを示し、《 》はサブカテゴリー、「 」はコード、『 』はエピソードを示すものとする。文脈でわかりにくい箇所には（ ）で補語を加えた。

1) 【わが子を迎える喜びと感動が湧く】

【わが子を迎える喜びと感動が湧く】は、《わが子を迎えるときが来た実感する》、《わが子の誕生に感動する》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。これは、妊娠期を経て、分娩期を迎え、わが子の存在を現実のものとして捉えることによって、喜びと感動が湧く体験である。

夫は、妻が分娩のため入院し、自分の立ち会い分娩が始まることで『この日が遂に来たなと気持ちが引き締まる』と感じている。『診察後の説明で先ほどよりも進行していることがわかり、もういよいよ生まれるのだな』、『助産師に努責していいと言われ、本当にあと少しなのだ実感する』というように、分娩が始まり、進行することによって、わが子が生まれる期待感が高まり、《わが子を迎えるときが来た実感する》のである。

また、『(児頭娩出から軀幹娩出場面まで見たとき) 児がこのように頑張っていて生まれてくることに感動』し、『自然に涙が出て強く嬉しいと思う。予想していたよりもはるかに大きい喜びの感情が噴き出す』といった《わが子の誕生に感動する》体験をしている。

2) 【無力な自分にできることをとにかく手探りでやってみる】

【無力な自分にできることをとにかく手探りでやってみる】は、《妻を気遣う》、《何もできない自分の無力さを感じる》、《自分にできることをやってみる》、《立ち会うわが身も辛いと感じる》、《立ち会う中で初めての出来事に戸惑う》の5つのサブカテゴリーで構成されていた。これは、夫が、立ち会い分娩中に何もできない自分、何をしたらよいのかわからない自分を無力に感じながらも、自分にできることはないかと探し、やってみようとする体験である。

夫は、『こんな痛そうな妻の姿を見たことがなかったため、可哀想である』と思い、『睡眠が取れていない妻を見て、本当に体力が持つのか心配でいっぱい』と《妻を気遣う》一方で、『自分にはどうすることもできない』、『何もできない』と感じており、『ケアを行う助産師に声をかけると邪魔になるだろうと思った』と、『自分は邪魔かもしれない』とさえとらえており、《何もできない自分の無力さを感じ》ていた。

立ち会い分娩が始まり時間が経過する中で、夫は少しでも妻のために役に立ちたいと思い、『妻が痛いというところをさすることや空調の調節をすることくらいしかできないが、何かしたいと思う』、『妻の汗をふくなど、自分ができることをしよう』と《自分にできることをやってみる》様子が見える。しかし、『今日の夜までには生まれるだろうと簡単に考えていた。(日勤帯の助産師に妻の母親が) あとどのくらいか聞くと日が変わるくらいと言われたとき、まだそんなにかかるのかと思った』というように、『分娩の終わりが見えないと感じ』て、がっかりしている。さらには、『もう一日続いたら(自分が)辛いから早く終わらないかなと思う』、『妻の痛そうな姿を見るのが辛く、立ち会いは肉体的にはもちろんだが、精神的にも疲れる』など、『自分の体力の限界を感じ』ており、《立ち会うわが身も辛いと感じ》ていた。

わが子誕生の瞬間は、『(児頭娩出場面を) 見たいという興味と生々しくて怖いという思いが葛藤する』体験が見られた。また、胎盤娩出場面や運ばれる胎盤を偶然目の当たりにする場面に遭遇し、『あまり直視したくないと嫌悪感を抱いた』と、《立ち会う中で初めての出来事に戸惑う》体験が見られた。

表2 立ち会い分娩をした夫の体験

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
わが子を迎える喜びと感動が湧く	わが子を迎えるときが来たと実感する	わが子を迎えるときが来たと気持ちを引き締める わが子が生まれる期待感が高まる
	わが子の誕生に感動する	無事に生まれてくれた安堵感 わが子が生まれたと実感する
無力な自分にできることをとにかく手探りでやってみる	妻を気遣う	妻を楽にさせてあげたい 痛みを軽減させてあげたい 頑張ってもらいたいと思う 苦しむ妻に頑張れと言わねばならない辛さ 妻を気遣う
	何もできない自分の無力さを感じる	立ち会っている自分の役割がわからない 自分は邪魔かもしれない 迷惑をかけてはいけないと思う
	自分にできることをやってみる	自分にできることをやる 助産師のやり方を真似てともにやる 母児の無事を願う
	立ち会うわが身も辛いと感じる	自分の体力の限界を感じる 分娩の終わりが見えないと感じる
	立ち会う中で初めての出来事に戸惑う	初めて見る胎盤に戸惑う 妻の姿に衝撃を受ける 児娩出への興味と怖さが混在する
	母親となる妻への称賛の念を抱く	母親となる妻の強さを感じる 妻の冷静さを感じる 母親は強いと感じる 妻にはかなわないと思う 妻をすごいと思う
父親としての意識が芽生える	父親としての意識が芽生える	頑張ったわが子に感謝する わが子の健康状態が気にかかる 自分の子どもであると思う 生まれたての子が生まれ持つ力を肌で感じる
	分娩に立ち会えたことに価値を見いだす	分娩に立ち会えたことに価値を見いだす
	家族を気遣い、家族に感謝する	家族に気を遣う 家族の存在を心強く感じる 自分を生んでくれたことに感謝する
医療者にさまざまな感情を抱きながら、任せる	医療者を信頼し任せる	医師を信頼し任せる 助産師・助産学生に感謝する 助産師から安心感を得る 助産師の経験に裏打ちされたケアに敬意を表す
	医療者の対応への不足を感じる	説明がないことに不安を感じる 対応に疑問を感じる 対応への不信・不満を持つ
自分なりに分娩の様相を読み取ろうとする	自分なりに分娩の状況を推測する	分娩が進んでいることを推測する 何か起こるのではないかと危機感を感じる 生まれる時期を予測する
	冷静に周囲を観察する	妻もまだ余裕があると感じる 予想とは違うこともあると感じる

3) 【母親となる妻への称賛の念を抱く】

【母親となる妻への称賛の念を抱く】は、《母親となる妻の強さを感じる》、《妻の頑張りを認める》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。これは、分娩時の妻の様子から、母親となる妻の強さを感じ、自分にはかなわないと思い、出産をやり遂げた妻の頑張りに対して称賛の念を抱く体験である。

夫は、『(妻が) 普段からは考えられない程の形相で、これだけ声が出るんだというほど叫んでおり、母親が強

くなるのは当然である』と思い、長く苦しい陣痛を耐え抜く妻に《母親となる妻の強さを感じて》いた。

また、『(分娩第1期に、妻が自分で冷静に状況を言い、受け答えしている姿を見て)、母親は強い、自分にはかなわない、すごいと改めて思った』、『妻に最後までよく頑張ったと言ったとき、やはり女性は強いと勝てないなど思っていた』と、出産を最後までやり遂げた《妻の頑張りを認めて》いた。

4) 【父親としての意識が芽生える】

【父親としての意識が芽生える】は、《父親としての意識が芽生える》、《分娩に立ち会えたことに価値を見いだす》、《家族を気遣い、家族に感謝する》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。これは、分娩に立ち会い、今まさに生まれたわが子を目の前にして、父親としての意識が芽生えるとともに、家族を思い、分娩に立ち会えたことへの価値を見いだす体験である。

『児出生後に児を見たとき、イメージしていた児の顔とは全く違うが可愛いと思い、自分の子どもであると実感していた』、『児出生時は、児に対して生まれてきたことへの感謝の気持ちを抱き、元気に育ってほしいと思っていた』と「頑張ったわが子に感謝」している。また、『生まれたけど泣かないため、泣かなければいけないのではないかと心配に思う』と「わが子の健康状態が気になり」、わが子が泣いたり授乳したりする姿から「生まれたての子が生まれ持つ力を肌で感じ」、《父親としての意識が芽生える》体験をしている。

また、わが子の誕生を見届け、夫が、今まで妻と共に頑張ってきた辛く長い時間をしみじみと実感する姿が見られた。また、『妻の喜ぶ顔を見たとき、一緒にこの場にいることができよかった』と夫自身も喜びを感じ、『妻が痛みを必死に我慢し何時間も頑張っていることを男性も実感して子育てすることが大切』であると感じており《分娩に立ち会えたことに価値を見いだす》体験であった。

さらに、夫は、《家族を気遣い、家族に感謝する》体験をしている。妻にとって実母の存在が大きいということを実感し、『家族だけにいる時間と夫がいる時間があればいいかなと思ひ、妻の父母に分娩室に入ってもらい、自分は陣痛室で待つ』と、妻の家族への気遣いを見せていた。さらに、今回、立ち会い分娩をしたことにより、『自分の親もこのように生んでくれたんだな、改めて妻も含めて親に感謝しなければならないな』と自分自身の親への感謝の言葉が聞かれた。

5) 【医療者にさまざまな感情を抱きながら、任せる】

【医療者にさまざまな感情を抱きながら、任せる】は、《医療者を信頼し任せる》、《医療者の対応への不足を感じる》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。これは、医療者とのかかわりの中で生じる、医療者への信頼、安心感、感謝の気持ちと、不満、不信感、対応への不足という、相反する感情を抱きながら、医療者に任せ

ている体験である。

わが子が元気かどうか気掛かりでならない夫は、児の産声や頭部の変形、チアノーゼ、また医療者の様子などを自ら観察し、わが子の健康状態を判断しようとしているが、『すぐに児の産声が聞こえたり、助産師が和気あいあいと児の計測を行っている姿を見たりして、安心感を抱く』、『多数の助産師がいたため、お任せするという気持ちでいた』、『スタッフの落ち着いた姿を見て、安心して（お産に）臨めると思っていた』と「助産師から安心感を得」ており、『(助産師は)ものすごく頼りがいがあり、ありがたいという感謝の気持ちだった』と「助産師に感謝」しており、《医療者を信頼し任せる》気持ちを持っていた。

一方では、『医師が（児の状況を）正確に判断していないのではないかと不信感を持つ』や『医師がゆっくり歩いて来る姿を見て、早く来いと苛立ちを感じていた』といった《医療者の対応への不足を感じる》感情が表出されていた。

また、『(医療者から)もう少しと言われたとき、どの程度がもう少しなのか分からない』、『医師からすれば2時間がもう少しなのか』、『はっきりとした説明がなかったことに対して、不安やイライラ感をもちながら立ち会っていた』、『胎児心拍数が低下したときに説明はなく、児は大丈夫か聞きたいという思いがあった。しかし、胎児心拍数低下による児についての説明を今聞いても妻に心配かけると思ひ、自分からは聞けなかった』のように、夫は医療者からの「説明がないことに不安を感じて」おり、分娩の状況に対する疑問や不安、不満などのさまざまな感情を抱いているが、それを直接聞くこともできず、悶々としながら医療者に任せている様子が伺えた。

6) 【自分なりに分娩の様相を読み取ろうとする】

【自分なりに分娩の様相を読み取ろうとする】は、《自分なりに分娩の状況を推測する》、《周囲を冷静に観察する》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。これは、夫が不安や危機感を抱きながら妻や周囲の様子を観察し、分娩が安全に進行しているかどうかを自分なりに分析・判断しようとしている体験である。

夫は、『陣痛が強くなりしゃべれなくなる妻を見たとき、余裕がないほど痛いのだろう』と陣痛の強さを推し量り、『人工破膜を行うと言われたとき、人工破膜をするとすぐに生まれるというイメージがあったため、もう生まれてくる』と「分娩が進んでいることを推測」して

いる。

さらに、夫は、分娩監視装置のアラーム音や陣痛促進剤の使用に、「何か起こるのではないかと危機感を感じ」、『もしも急変して母児の選択をしなければならなくなったときは妻を選ぶ』と覚悟している。しかし、『何か異常があるのならその時点でわかっていることだと自分に思わせることで気持ちを落ち着かせて』おり、医療者に質問することなく、「自分なりに分娩の状況を推測」しようとしていた。

また、夫は、「周囲を冷静に観察し」ており、『(立ち会い開始時)妻が飲食できて元気な姿を見て、余裕そうだけどこんな感じなのかなと予想との違いを感じ少しホッとしていた』と「妻もまだ余裕があると感じ」ており、『破水したと助産師に言われたとき、思っていたよりも量が少ないことにそんなもんなのだと拍子抜け』するなど、「予想とは違うこともあると感じ」ている。

考 察

1. わが子を迎える喜びと感動が湧く中で、夫は無力な自分を感じる

夫は、妻が分娩のために入院し自分自身も陣痛室に到着して分娩第1期の立ち会いが始まることによって、【わが子を迎える喜びと感動が湧く】体験をしていた。夫にとって、立ち会い分娩の始まりは、わが子の存在がより明瞭になり、わが子を迎える実感が湧く、大きな節目として心に迫る体験であったことが伺える。

しかしながら、夫は【無力な自分にできることをとにかく手探りでやってみる】体験をしている。夫は、陣痛に耐える妻が可哀想でならず、妻の体力が持つのか心配し、何とかしてやりたいという思いを抱いているが、「何もできない自分の無力さを感じる」状況にある。これまでに、出産場面での妻に対する自らの存在価値を見いだせていない夫が存在すること¹¹⁾や、自らの役割が明確にされないまま立ち会うことは夫にとってストレスフルな体験であること¹²⁾が報告されていたが、今回、夫から『自分は邪魔』という言葉が聞かれた。わが子の誕生に立ち会うという初めての体験において、夫が自分の無力さを感じ、さらに自分が邪魔かもしれないと思うことは、立ち会い分娩体験の満足度だけではなく、夫の自尊心をも低下させてしまうことに繋がると思われる。しかし、寺内ら¹³⁾が「傍らに寄り添う夫の存在自体が妻への精神的安定につながる効果的な役割を果たすことを伝え、

出産中に夫が自らの存在価値を見いだせるよう、指導していくことが必要である」と述べているように、分娩に立ち会う中で、無力感や疎外感を感じることなく、夫にとって居心地のよさと自らの存在価値を見いだせるような体験にすることは十分可能であると考えられる。

また、初めての立ち会い出産の場面における体験の多くは、夫にとって“未知なる体験”であり、「立ち会う中で初めての出来事に戸惑う」様子が伺えた。特に、胎盤に関しては、予期せぬときに見えてしまった驚きや嫌悪感が生じていた。夫の中には、血液を見ることや出産の生々しい場面が苦手な人もいると考えられ、このような場面では否定的感情が見られやすいと思われる。児の出生という喜びと感動に満ちたこの場面で、夫の立ち会い分娩への満足度を低下させることがないように、夫の様子により一層配慮した行動をとることが必要であろう。

2. 母親となる妻への称賛の念を抱きながら立ち会い続け、父親としての意識が芽生える

分娩への立ち会い開始から、夫は、自分にできることはないかと、立ち会い出産の場における自分の役割を見いだそうとしている。その一方で、夫はわが子が生まれるまでの時間の見当がつかず、辛そうな妻の傍らで立ち会う自分自身の辛さをも感じている。しかし、夫は、自分自身の辛さを妻や医療者には表出せず、自分の中にとどめている。その背景には、苦しんでいる妻の状況を目の当たりにして、自分の辛さを訴えられないという妻への配慮が見える。また、夫は妻を最優先に考え、立ち会い続けているため、妻が望んでいたような分娩の展開ではなくなってきたときに、妻の残念な気持ちや悔しさを自分のことのように感じている。母親になろうとしている妻の頑張りを間近で感じることによって、夫自身もまた父親になっていくのだという共通の思いを共有することができるのではないかと考える。

分娩第2期に入ると、妻が分娩室に移動することや助産師が分娩の準備を始める様子から、夫のわが子の誕生への期待は分娩第1期よりもさらに高まる。

そして、今まさに生まれたわが子の存在を実感したときには、自然に涙が出るような、予想していたよりもはるかに大きな喜びの感情が見られた。わが子へのねぎらいの気持ちや感謝の気持ちは、立ち会い分娩により夫自身も一緒に頑張ったと思えるからこそ生まれる感情であり、分娩に立ち会うという体験は、夫にとって父性意識の芽生えの第一歩となる貴重な体験であったと思われる。

また、本研究では、わが子を生んでくれた妻に対してだけでなく、自分を生んでくれた親への感謝が表出されていた。今回、分娩に立ち会う中で、その大変さを目の当たりにしたこと、立ち会う者の辛さと立ち会えたことへの喜びを感じたこと、さらには、自分自身が親という立場になることによって、自分の親もまた、このように力を尽くして生んでくれたのだと、夫は実感することができたのではないだろうか。そして、この感謝の気持ちは、今度は自分が親となってわが子を慈しみ育てていくという、夫の決意につながるものでもあると考える。

3. 医療者との関わりから、自分なりに分娩の様相を読み取ろうとする

夫は、分娩に立ち会う中で、【医療者にさまざまな感情を抱きながら、任せる】状況にあった。特に、今回の対象者の場合、妻に医療介入のあった事例が11名中8名あり、夫が母児の健康状態に対する危機感や帝王切開になるかもしれないといった不安を持ちながら分娩に立ち会っていたことが伺える。しかし、夫は、そのような思いを持っていながらも周囲の医療者には気持ちを打ち明けず、【自分なりに分娩の様相を読み取ろうとする】、すなわち、妻や周囲の様子から自分なりに判断したり、納得したりしようとしていた。さらに、夫は、医療者からの説明に対して、疑問や不足を感じているが、それらを解消するための行動には移していない。このため、夫が思う状況と医療者の取る行動との間にずれが生じることがあり、夫は苛立ちや不信感を感じるのである。

これらの多くは、医療者からの説明がなかった、あるいは、説明はあったが夫にとって納得できる内容ではなかったことから生じる感情であり、夫が、状況を十分理解しないまま、疑問を持ち続けたまま立ち会い続けている様子が伺える。中島・牛之濱²⁾によると、立ち会い分娩後の夫からの医療者への要望として、「その時々でできることをもっと詳しく教えてほしい」に次いで「出産の状態を詳しく説明してほしい」が多くあげられている。本研究においても、妻の分娩が安全に進行しているのかが気になり、わが子が生まれるまでの時間の見当がつかず、分娩の終了が見えない状況において、夫は、聞きたいけれど聞けない、言いたいけれど言えないと感じている。夫が自分の思いを胸の中におさめており、質問をしないことが必ずしも状況を正しく把握しているとは限らないということを理解しておきたい。

研究の限界と今後の課題

本研究は、地方都市にある第3次医療施設である一施設で実施した。全例経陰分娩ではあったが、陣痛促進などの医療介入を行った事例があり、そのことが夫の体験を集約するうえでの妥当性に対する疑義は否めない。今後は、産科的医療介入の程度や内容など状況を限定したうえで、さらなる検討を進めていきたい。

結 論

立ち会い分娩をした夫の体験は、【わが子を迎える喜びと感動が湧く】、【無力な自分にとにかくできることを手探りでやってみる】、【母親となる妻への称賛の念を抱く】、【父親としての意識が芽生える】、【医療者にさまざまな感情を抱きながら、任せる】、【自分なりに分娩の様相を読み取ろうとする】の6つのカテゴリで構成されていた。

夫は、わが子を迎える喜びと感動が湧く中で自分の無力さを感じながら、それでも自分にできることを手探りでやろうとしている。医療者には、苦しむ妻を前にして、自分の辛さや不安を表出することなく、ひたすら立ち会い続けている夫の心情を酌み取り、夫にとってもよい分娩体験となるような関わりが求められる。

謝 辞

対象者の皆様、研究対象施設の皆様、ご指導くださいました諸先生方に心より感謝申し上げます。

(なお、本研究は2013年度徳島大学大学院博士前期課程修士論文の一部に加筆修正したものである。)

文 献

- 1) 厚生労働省：妊娠・出産に関する安全性の確保と不妊への支援、健やか親子21, 2010. <<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0331-13a015.pdf>> (アクセス：2013年6月27日)
- 2) Petra G, Marlene CM, Abbas ST: Factors related to childbirth satisfaction. Journal of Advanced Nursing 46 (2): 212-219, 2004
- 3) 中野美佳, 森恵美, 前原澄子：出産体験の満足に関連する要因について、母性衛生, 44 (2), 307-314,

- 2003.
- 4) 松井智子, 丸山美佳, 小原小夜子 他: 夫婦で取り組むお産と満足感の関連性—バースプラン作成からバースレビューを通して—, 大津市民病院雑誌, 10, 46-49, 2009.
 - 5) 関根憲治: 夫立ち会い分娩の問題点と対策, 周産期医学, 23 (7), 1037-1041, 1993.
 - 6) 永井宏, 岡村けい子, 鈴木孝子: 立ち会い分娩の功罪, 周産期医学, 18 (1), 47-53, 1988.
 - 7) 小此木啓吾, 持丸文雄: 周産期の臨床と父親の役割, 周産期医学, 18 (1), 115-119, 1988.
 - 8) 三上由美子: 第1子出産前後の女性がパートナーに対して抱く愛情と出産の様相との関連, 母性衛生, 53 (2), 287-295, 2012.
 - 9) 青野真歩, 高木恭子, 笹川泉 他: 分娩立ち会いが立ち会う夫の感情に与える影響—立ち会い群と非立ち会い群の比較—, 母性衛生, 45 (4), 530-539, 2005.
 - 10) 出口信子, 米村聡実, 福井奈美子 他: 夫の分娩立ち会い体験の自己評価とその関連要因, 母性衛生, 40 (4), 468-472, 1999.
 - 11) 寺内友香, 野口真貴子, 久米美代子: 初産婦の夫が立ち会い出産に対して抱いていたイメージと実際との相違, 日本ウーマンズヘルス学会誌, 9 (1), 67-78, 2010.
 - 12) 中島通子, 牛之濱久代: 立ち会い分娩後の夫の意識に関する研究, 母性衛生, 44 (2), 307-314, 2007.
 - 13) 森崎聡美, 小川久貴子: 夫立ち会い分娩に臨む夫婦への援助の方向性—夫立ち会い分娩でより満足が得られるために—, 日本ウーマンズヘルス学会誌, 2, 104-111, 2003.
 - 14) 高橋恭子, 井原まどか, 堤淳子 他: 立ち会い分娩が夫の育児・家事に与える影響について, 日本看護学会論文集: 母性看護, 35, 105-106, 2004.
 - 15) 伊藤靖子, 山川美由紀, 鈴木陽子 他: 夫の妻や子に対する意識の変化—夫立ち会い分娩を経験した夫と経験しない夫の比較—, 日本看護学会論文集: 母性看護, 37, 110-112, 2006.
 - 16) 木村薫, 白井やよい, 中村マリ: 夫立ち会い分娩についての意識調査 (第3報)—父親の育児参加と意識—, 日本看護学会論文集: 母性看護, 25, 21-23, 1994.
 - 17) 下中弘: 哲学辞典, 88, 平凡社, 1971.

Experiences of husbands attending their wives' childbirth

Tomoe Fujikawa¹⁾, Keiko Takebayashi²⁾, Michiko Kono²⁾, and Mari Haku²⁾

¹⁾*The University of Tokushima Graduate School*

²⁾*Institute of Health Biosciences, the University of Tokushima Graduate School*

Abstract Objectives : To describe the experiences of husbands who attended their wives' childbirth.

Methods : Qualitative and descriptive analysis of narratives from eleven husbands of primipara women who consented to this study. A questionnaire was used as guide for participants based on the Guidelines for Interview Questions.

Results : Six thematic categories were revealed from the narratives of husbands describing their experiences when they attended their wives' childbirth. These are: 'feeling pleasure and excitement to have my own baby', 'trying to do what I can do through trial and error although there may be little I can do', 'feeling respect for my wife who is becoming a mother', 'having a sense of being a father', 'trusting in healthcare professionals and having various feelings towards them', and 'trying to understand what childbirth is in my own way'.

Conclusion : Although the husbands felt their helplessness, in this situation, they also felt the excitement of having their own baby- they were hopeful and tried to do what they could do through trial and error. Healthcare workers need to understand the husbands' experiences while attending their wives' childbirth, not showing their own hardships and anxiety in front of their wives who were experiencing the joys and pain of childbirth, and to help them to make the childbirth a wonderful experience for them and for their wives as well.

Key words : husband, husbands' attendance during their wives' childbirth, experience